

アジャイルプロセス入門 第Ⅲ部 テキスト
～ベンダにとってのメリット、導入への留意事項～

第1版
2011/11/1



アジャイルプロセス協議会
西日本アジャイルプロセス研究会

アジャイルプロセス入門 第Ⅲ部

～ベンダにとってのメリット、導入への留意事項～

アジャイルプロセス協議会
西日本アジャイルプロセス研究会



Copyright by West Japan Agile Process Consortium



目次

- 第8章 アジャイル開発のメリット
- 第9章 アジャイル開発を導入または実施する点での留意点

第8章

アジャイル開発のメリット

メリットを活かせるアジャイル開発を



Copyright by West Japan Agile Process Consortium



アジャイル開発のメリット

- アジャイル開発を行うメリットとは「そのユーザーに適したモノをスピーディーに提供する」という価値を実現できる。
 - ◆ 単純に開発における人件費の多寡を争っているだけでは、いずれどこかの国に負けてしまう。
 - ◆ ユーザーに訴求すべき点は「提供する価値が多い」か「スピード」だ。
 - ◆ 「提供する価値」として『質的』『機能的』な価値を増やすことは難しいけれども、『そのユーザーに適したモノ』を提供することなら出来る。
- 最大価値の創出
 - ◆ これを企業の利益につなげられないとメリットにならない
- 企画の実現スピード。
- 顧客の企画を実現することに、注力できる。

アジャイル開発のメリット

- 顧客との一体感。
 - ◆ ウォーターフォール開発では、初期の期間は密着、しばらくすると自社にこもって独自に、後期に再度、顧客と密着というサイクル。
 - ◆ 各サイクルが長くなると、顧客との距離ができてしまい共同で作り上げるという一体感が希薄になりやすい。
 - ◆ できるだけ、コンパクトかつ短期間に合意し作り上げるアジャイルでは顧客の思い、変化を見てとれ安心感が持続できる開発が進められる。
- 顧客がプロジェクトに深く参加してもらえる。
- チーム・人の活性化
- 顧客と成果、課題を共有し、互いの納得度の高い協調関係を築ける。

アジャイル開発のメリット

- コストが一定である
- 小さな問題は常時発生するが大きなリスクは発生しない
- 変更要求の発生が致命的なリスクにならない
- 早期に動くモノが確認出来る為、勘違い、取違い、気の迷い(今は後悔している)など早期に発覚
- 動作するものを元に顧客と会話できるため、認識のズレを早期に発見できる。
- 変化があることを前提とするため、仕様変更リスクをどちらかが一方的に負わなくてよい。
- 顧客の要求事項を顧客が覚えているうちに実現できる。
- リリース後の顧客満足度が高い。
- 最悪、途中でやめても、何らかの成果が残りやすい。

アジャイル開発のメリット

- プロセスを切らないのでオールラウンダーが早期に育成できる。
- ある程度ジェネラリスト的な育成が見込める。
- ユーザーが要求する機能をコミュニケーションをとりながら開発していくことで開発者の業務スキルが知識から知恵となる。
- 業務分野の背景等を理解していくことにより同様な業務分野のユーザーに対してビジネスの価値を生み出せるような機能の提案ができるようになる。
- 開発者が育ちやすい。特に暗黙知としてある技術の伝承が、従来のウォーターフォールモデルに比べ、効率的に行い易い。
- 顧客のビジネスや考え方に触れる機会が増え、資質の備わったエンジニアはより早く成長する。

第9章

アジャイル開発を導入または実施する点での留意点

簡単には、成功しない

アジャイル開発を導入または実施する点での留意点

- プラクティスは、その背景となる原則を理解し、チームに合わせてプラクティスの採否判断やカスタマイズを行うこと。
- 開発サイズ(規模)の見積を行う場合に、どの方法で行うかを事前に決定しておく必要があり、かつ、チーム(ユーザーも含む)での同意も必要である。

アジャイル開発を導入または実施する点での留意点

- アジャイル開発におけるチーム構成は、ヒエラルキー型のチーム構成とは異なるため、プロジェクトマネージャーやリーダーは、従来のような指示・命令によってチームを動かすのではなく、自律的な合意形成を図るように努めること。
- プロセスの評価を人の評価に置き換えない。
- 自社のフェーズレビューを突破する自信がなければ止めておく。
- チーム編成には絶対に妥協しない。
- 責任の所在を明確にしておく。

アジャイル開発を導入または実施する点での留意点

- 変化を受け入れるというアジャイル開発を誤解し、安易に要望を受け入れることは避ける。
 - ◆なぜ、変化が発生したのか、その変化は世論なのか個人なのかを距離感がないアジャイル開発の特徴を生かして分析し、設計すべきである。
- “変化を受け入れる”にも限度があることを自戒する。
- 顧客ともどもリスクの分担を正しく理解し、合意する。

アジャイル開発を導入または実施する点での留意点

- 手法を用いることが目的でないことを肝に銘ずる。手法によりクリアされる課題を意識し、顧客とWin-Winのシステムを作りあげることがゴール。
- 目的を見失わない(プロセス導入がゴールではない)
- ゴール・目的を明確にすること。

アジャイル開発を導入または実施する点での留意点

- アジャイルという言葉が多用しない。アジャイル開発が持つ謎、不明点に敏感な人がいることは確かで、その人たちに過剰反応させないためのファシリテーションが必要。
- 必要でかつ価値を生み出すだけの量で少しずつユーザーが要求し、それに対して見積・開発していくスタイルは、一般的でないという雑音が、ユーザー側の周りから漏れ始め、その雑音を打ち消す努力が必要となる可能性がある。
 - ◆ 現時点の多くの開発スタイルでは、必要なものを全てを一度にユーザーが要求し、それに対して見積・開発していくことが一般的である。

アジャイル開発を導入または実施する点での留意点

- 一括請負にしない。
- 瑕疵担保契約は極力回避する。
- 権利がある側が権限を移譲する。義務を負わせた側が義務を取り払うよう明示する。
- 義務と権利のバランスを保つこと。
- ベンダ経営者層、コンプライアンス策定部署もきちんと巻き込む。
- 顧客の予算取りと決裁処理を頭の片隅に置いておく。
- 顧客にコストの意識を常にもってもらおう。
- 日本の商習慣に合わないことが多い。

アジャイル開発を導入または実施する点での留意点

- エキスパートを外部から迎える。
- アジャイル向きではない案件に無理やり適用しない。
- ある程度のプロジェクトを経験していないと参加が難しい。
- 上司、顧客を納得、合意させたうえで導入する。
- 小さく始める。「アジャイル」という新しい言葉に惑わされて、大きく構えて しまいがちで、それが頓挫の元になってしまうことがある。

アジャイル開発を導入または実施する点での留意点

- 銀の弾丸だと思わない。
- アジャイルは魔法ではないこと。
- 条件が整えば、アジャイルもウォーターフォールもほとんど差がないことを認識すること。
- ウォーターフォールと比較して安くも早くもならないことを正しく認識する(リスクの分布が異なるだけ)。

アジャイル開発を導入または実施する点での留意点

- ラピッドと区別すること。
- 奪い合うことをやめ、分かち合うこと。
- 楽になるのではなく、価値あるものになるだけである。

<http://www.wjapc.jp/>

著者

新保康夫、猪原信彦、谷本誠、
前野公孝、山根英次、日野数司、
松本真一、神谷厚輝、八木希仁、
塩田英二

アジャイルプロセス入門 第Ⅲ部 テキスト
～ベンダにとってのメリット、導入への留意事項～

発行 2011年11月1日 第1版
監修 一般社団法人西日本アジャイルプロセス協議会
著者 西日本アジャイルプロセス研究会

©一般社団法人西日本アジャイルプロセス協議会

WJAPC
West Japan Agile Process Consortium